

平成26年 9月

# 田中健一郎 学位論文審査要旨

主査 兼子 幸一  
副主査 前垣 義弘  
同 中島 健二

## 主論文

Impulsive compulsive behaviors in Japanese Parkinson's disease patients and utility of the Japanese version of the Questionnaire for Impulsive-Compulsive Disorders in Parkinson's disease

(日本人パーキンソン病患者における衝動制御障害の臨床的検討と日本語版調査票の作成)

(著者：田中健一郎、和田（礒江）健二、中下聡子、山本幹枝、中島健二)

平成25年 Journal of the Neurological Sciences 331巻 76頁～80頁

## 参考論文

1. 長期間のせん妄状態により多様な精神症状を呈したと考えられた若年発症Parkinson病の1例

(著者：田中健一郎、和田健二、矢野英隆、渡辺保裕、中島健二)

平成24年 神経治療学 29巻 441頁～444頁

2. Clinical evaluation of fatigue in Japanese patients with Parkinson's disease

(日本人パーキンソン病患者における疲労の臨床評価)

(著者：田中健一郎、和田（礒江）健二、山本幹枝、田頭秀悟、田尻佑喜、中下聡子、中島健二)

平成26年 Brain and Behavior 掲載予定

# 学 位 論 文 要 旨

Impulsive compulsive behaviors in Japanese Parkinson' s disease patients and utility of the Japanese version of the Questionnaire for Impulsive-Compulsive Disorders in Parkinson' s disease

(日本人パーキンソン病患者における衝動制御障害の臨床的検討と日本語版調査票の作成)

パーキンソン病 (PD) における衝動制御障害 (Impulsive compulsive behaviors : ICBs) はPDにおける非運動症状の1つであり、衝動的な欲求を制御できない状態を意味する。ICBsには病的賭博、性欲亢進、強迫的買い物、強迫的過食、反復常同行動、抗PD薬の強迫的使用などの種々の衝動行動が含まれる。ICBsは当事者ならびに家族介護者の認識が乏しく、隠蔽も可能であることから日常診療で見過ごされる可能性が高い。諸外国においてはICBsの発症頻度や関連因子が報告されているが、我が国においてはそれらの詳細な報告はなく、不明な点が多い。

本研究では、PD患者を対象に聞き取り調査をもとにICBsの有病率を明らかにし、患者背景、運動機能、非運動症状、治療薬などの包括的な調査を行い、日本人PD患者におけるICBsの特徴を検討した。また、海外においてPD患者のICBs調査票として有用性が報告されているQuestionnaire for Impulsive-Compulsive Disorders in Parkinson' s disease (QUIP) を和訳して日本語版QUIP (J-QUIP) を作成し、その有用性も検討した。

## 方 法

QUIPの原著者に許可を得た後、日本語に翻訳しJ-QUIPを作成した。鳥取大学医学部附属病院通院中のPD患者に対してJ-QUIPを実施し、回答が得られた患者に対して本人または家族に直接聞き取り調査を行い、Voonらにて提唱されているICBsの診断基準をもとにICBsの有無を診断した。ICBsの症状毎の有病率を算出し、ICBsの有無で2群に分け、ICBsの関連因子を統計学的に検討した。また、J-QUIPの感度や特異度を算出し、その有用性を検討した。

## 結 果

PD患者121人に対してJ-QUIPを実施し、118人が回答可能であった。回答者のうち93人にICBsの有無を診断した。全ICBsの有病率は21.5%であり、症状毎の有病率については、病的

賭博が6.5%、性欲亢進が3.2%、強迫的買い物が3.2%、強迫的過食が3.2%、反復常同行動が6.5%、抗PD薬の強迫的使用が2.2%であった。ICBsの有無により群別し、統計学的に有意差のある因子を検討すると、ICBsを有するPD患者は①調査時年齢が若い、②発症年齢が若い、③PDの罹病期間が長い、④レボドパ投与量が多い、⑤抗PD薬のレボドパ換算総投与量が多いという特徴を有していた。また、J-QUIPの感度、特異度はいずれのICBs症状においてもそれぞれ80%以上であった。

## 考 察

日本人PD患者を対象とした本研究におけるICBs有病率は欧米や韓国で行われた調査と同程度であったが、中国、台湾などの他のアジア地域の報告より高かった。ICBsはドパミンアゴニスト使用との関連性が報告されており、ドパミンアゴニストの使用量が少ない中国や台湾などではICBsの有病率が少ない可能性が考えられた。本研究においても、統計学的に有意差は認めなかったが、ドパミンアゴニストの使用量はICBsと関連する傾向( $p=0.057$ )を示した。一方、欧米や韓国と比較して病的賭博の有病率が高かった。本研究において病的賭博は特にパチンコが多く、パチンコに行きやすいという我が国の環境因子も影響している可能性が疑われた。

ICBsの関連因子に関しては、年齢、発症年齢、罹病期間などの患者背景や治療薬との関連が海外で報告されているが、本研究においてもこれらの因子とICBsの関連性が認められた。運動機能やうつ、意欲低下、睡眠関連や自律神経障害などの非運動症状はICBsとは関連性を認めなかった。

ICBsを検出するための質問票についてはQUIP以外にも複数報告されているが、それらはICBsのすべてを網羅しておらず、また対象をPD患者に限定した質問票ではない。QUIPはPD患者のICBsのスクリーニング検査としての有用性が報告されている。本研究においてもJ-QUIPの感度や特異度は高くスクリーニング調査票として有用性が確認できた。しかし、偽陽性や隠蔽例の存在に注意が必要である。

## 結 論

日本人PD患者におけるICBsの有病率は欧米や韓国と同程度であったが、病的賭博の有病率は欧米や韓国より高かった。日本人PD患者におけるICBsの関連因子として年齢、発症年齢、罹病期間や薬剤との関連が示され、運動機能や非運動症状との関連は乏しかった。また、J-QUIPはPD患者におけるICBsのスクリーニング質問票として有用であった。